『源氏物語』の頭中将の笛と和琴

関河眞克

一、はじめに

『源氏物語』には音楽演奏場面が数多く描かれている。平安時代の貴族たちにとって、音楽は学問や和歌などと並んで、必ず身に付けて置かなければならない大切な能力の一つであった。従って、この物語自体が平安時代の貴族社会を舞台とするものである以上、音楽の演奏場面が多いと云うのも当然と云える。このような音楽関連記事は、一見何気ない日常活動の活写と思えるが、実のところ後述するように、物語の展開を側面からしなやかに支える役割を担っているのである。

一方、この物語の主人公光源氏と最も係わりの深い男君の一人が頭中将①である。父は左大臣、母は桐壺帝の妹宮と云う、生まれも育ちも申し分のない藤原氏を代表する貴公子であり、光源氏とは生涯を通じて無二の親友であると同時に、時にはライバルとして厳しく対峙すると云う関係にある。

そこで本稿ではその頭中将に焦点を当てて、物語のどのような展開の中で何の楽器を演奏し、そして、それはどのような解釈が可能なのかについて考察をしてみたい。

二、桐壺帝の時代

この時代は、時の帝の妹宮を正室に持つ「御おぼえいとやむごとなき」（桐壺①四八②）左大臣と、春宮の祖父で「つひに世の中を知りたまふべき」（桐壺①四八）右大臣の二大勢力が拮抗する形で政権の座を分け合っていた。本来であれば右大臣が帝の外戚として権勢を牛耳っていてもおかしくはないが、明王と讃えられた桐壺帝は左大臣を重用して、以て政治勢力の均衡を図っていた。このような

政情の中、頭中将は蔵人として帝の側近くにあって、光源氏や左大臣と共に帝の親政を支えていた。

ただし、留意して置かなければならないことは、頭中将が政略結婚のために右大臣家の四の君を正室として迎えたと云う事実である。この出来事は賢木巻以降になると次第に重みを増して来る。

さてここで、光源氏との係わりを軸としながら、この時代の頭中将の立ち位置を明確ににしておきたい。先ずは公務における二人の関係を確認してみよう。

帝の側近頭中将は、「七つになりたまひしこのかた、帝の御前に夜昼」（須磨②一八四）伺候している光源氏とは、当然ながら日夜連携して公務に臨んでいたことは想像するに難くない。実際物語の中でも、「日たけて、おのおの殿上に参りたまへり。（略）公事多く奏し下す日にて」（紅葉賀①三四五）と描かれている。加えて、青年時代は二人とも近衛府の将官としても職掌を同じくしていた。

一方、私事における二人の行状はどのようなものであったのだろうか。

御むすこの君たち、ただこの御宿直所の宮仕をつとめたまふ。宮腹の中将は、中に親しく馴れきこえたまひて、遊び戯れをも人よりは心やすく馴れ馴れしくふるまひたり。（帚木①五四）

光源氏の「御宿直所」は宮中の淑景舎と云う所で、嘗て母の桐壺更衣が居住していた局である。そこに左大臣の子息たちが日参して来て、中でも頭中将は「遊び戯れ」を誰よりも「心やすく馴れ馴れしく」していたと云う。

里にても、わが方のしつらひまばゆくして、君の出で入りしたまふにうち連れきこえたまひつつ、夜昼、学問をも遊びをももろともにして、をさをさ立ちおくれず、いづくにてもまつはれきこえたまふほどに、おのづからかしこまりもえおかず、心の中に思ふことも隠しあへずなむ、睦れきこえたまひける。（帚木①五五）

「里」とは左大臣邸のことで、そこでも頭中将は光源氏と「夜昼、学問をも遊びをももろともに」しているとある。つまり、光源氏の本拠淑景舎でも時々通う正室葵上の住む左大臣邸でも、光源氏と頭中将とは四六時中一緒なのである。まさに義兄弟以上の間柄、親友中の親友といった関係だと云える。お互いに「心の中に思ふことも隠し」切れない。青春時代の心中の秘事とは恋愛譚であることは言を俟たない。事実、頭中将は「すきがましきあだ人なり」（帚木①五四）と評され、光源氏も「さるべき隈にはよくこそ隠れ歩きたまふなれ」（帚木①九四～九五）などと陰口を叩かれている。この他にも末摘花や源典侍をめぐる二人の恋の争奪譚などが紹介されているように、恋愛をめぐる秘密事は枚挙に暇がなかったであろう。

これほど親密な交友振りを知れば知るほど、倉田実氏や木船重昭氏が指摘[3]されているように、この二人はほぼ同年齢と考えるべきではないか。寧ろそのように捉えてこそ「えならぬ二十の若人たちの御中」（紅葉賀①三四三）と云う記述が生彩を放って来る。

次に、この時期頭中将は、どのような楽器を手にしてどのような演奏をしていたのか、そして、それはどのような解釈が可能であるのかについて見て行きたい。

瘧病の加持祈禱のために北山を訪れていた光源氏一行が帰洛する日、頭中将は出迎えに参上した。折からの満開の桜を惜しんで花陰の岩隠れの苔の上に並み居て酒宴を催す。

頭中将、懐なりける笛とり出でて吹きすましたり。弁の君、扇はかなううち鳴らして、「豊浦の寺の西なるや」とうたふ。

（若紫①二二三）

やがて頭中将が「笛とり出でて吹き」澄ます。彼の笛の音は、遥か後になっても宇治八宮に「澄みのぼりて、ことごとしき気のそひたる」（椎本⑤一七一）と回想されるほど印象強く一種独特のものであった。頭中将は笛の上手として造型されていることは明らかである。

次の演奏場面は、頭中将が光源氏を潜かに尾行して、故常陸宮邸への忍び歩きを暴き出した夜のことである。秘密を共有したその名残りに絆されたためか別れ難く、それぞれの予定もかなぐり捨てて左大臣邸へ向かう。

おのおの契れる方にも、あまえてえ行き別れたまはず、一つ車に乗りて、月のをかしきほどに雲隠れたる道のほど、笛吹きあはせて大殿におはしぬ。（略）つれなう今来るやうにて、御笛ども吹きすさびておはすれば、大臣、例の聞き過ぐしたまはで、高麗笛とり出でたまへり。いと上手におはすれば、いとおもしろう吹きたまふ。

（末摘花①二七三）

牛車の中で二人は仲良く笛を合奏する。無論光源氏も笛の名手である。[4]そして帰宅した後も引き続き二人は笛を吹き合わせている。それは中川正美氏が指摘[5]されているように、荒廃した古宮でひっそり七弦琴を奏でる姫君への慕情の共有でもあった。二人が笛に興じていると、左大臣が高麗笛を携えて遊びに加わる。「例の聞き過ぐしたまはで」とあるように、笛を聞くとじっとはしていられない。即ちこの一文は、頭中将の笛は「いと上手」の父大臣からの相伝であると云うことを物語っている。[6]

同じ年の十月に朱雀院行幸があり、これに先立って御前の試楽が催された。

源氏の中将は、青海波をぞ舞ひたまひける。片手には大殿の頭中将、容貌用意人にはことなるを、立ち並びては、なほ花の

かたはらの深山木なり。　（紅葉賀①三一一）

その晴れの舞台で、頭中将は光源氏と共に青海波を舞った。若紫巻までは公私共にほぼ対等に競い合ってきた二人ではあったが、ここに至って「立ち並びては、なほ花のかたはらの深山木なり」と扱き下ろされている。末摘花を巡る恋の鞘当てでも遅れを取った頭中将は、公の場でも後塵を拝するようになったことが明瞭に示される。

花宴巻でも、南殿の桜花の宴で頭中将は柳花苑の見事な舞を披露して異例にも御衣を賜るが、光源氏はその舞楽行事の一切を統括すると云う大きな役回りを担っており、光源氏の優位が一層顕著となっていることが読み取れる。

その桜花の宴の翌日のことである。

「よろづのことよりは、柳花苑、まことに後代の例ともなりぬべく見たまへしに、ましてさかゆく春に立ち出でさせたまへらましかば、世の面目にやはべらまし」と聞こえたまふ。弁、中将など参りあひて、高欄に背中おしつつ、とりどりに物の音ども調べあはせて遊びたまふ、いとおもしろし。

（花宴①三六二）

光源氏が左大臣邸で大臣と対面している場に頭中将たちが現れて、それぞれに楽器を手にして「物の音ども調べ」合わせた。「高欄に背中おしつつ」とあるので、演奏されている楽器は、前屈み姿勢でなければ演奏ができない箏や和琴といった類のものではない。であれば末摘花巻で協奏したように頭中将と光源氏が横笛を吹き合わせ、若紫巻で葛城を歌った弁の君が扇を打ち鳴らして催馬楽を歌ったのかもしれない。そうとは書かれていないが、わざわざ「物の音ども」と暈してあったり、「弁、中将など参りあひて」とさりげなく記してあるのは、作者がそういった想像を掻き立てる効果を狙ってのことであろう。また、「いとおもしろし」との賛辞が贈られているから、横笛は名手の頭中将と光源氏が吹いたと考えても的外れとは云い切れない。

三、朱雀帝の時代

朱雀帝の時代になって三年目に桐壺院が崩御すると政情は激変し、帝の外戚右大臣一族が「今はいとど一族のみ、かへすがへす栄えたまふこと限りなし」（賢木②一三八）と云う新しい世の中となる。政権は右大臣派の独占するところとなった。左大臣は自ら職を辞し、頭中将（この時点では既に三位中将）も「このたびの司召にも漏れ」（賢木②一三九）るといった憂目に遭い、光源氏も自邸の二条院や左大臣邸に引き籠ったままである。

大将殿（＝光源氏）かう静かにておはするに、世ははかなきものと見えぬるを、（頭中将は）ましてことわりと思しなして、

常に参り通ひたまひつつ、学問をも遊びをももろともにしたまふ。

（賢木②一三九）

このような状況下にあっても頭中将は右大臣派に靡くことなく、光源氏とはこれまでと一向に変わることのない交友を保ち続けて、学問や文作り、韻塞や管弦などを共に楽しんでいる。同志的結束の固さが物語られている一文である。

そんなある日、左右に別れて競い合った韻塞で、右方の頭中将方が負けを喫した。二日ほど経って頭中将は負態の宴席を主催し、やがて打ち解けた管弦の遊びがあった。

二日ばかりありて、中将負態したまへり。（略）階の底の薔薇けしきばかり咲きて、春秋の花盛りよりもしめやかにをかしきほどなるに、うちとけ遊びたまふ。中将の御子の、今年はじめて殿上する、八つ九つばかりにて、声いとおもしろく、笙の笛吹きなどするをうつくしびもてあそびたまふ。四の君腹の二郎なりけり。世の人の思へる寄せ重くて、おぼえことにかしづけり。

（賢木②一四一）

負態は専ら酒肴で勝ち組の面々を持て成す宴席である。そこに四の君腹の二郎少年が物語に初めて登場する。日頃は母方で養育されている「八つ九つばかり」の少年が、そのような酒席に登場するのも冷静に考えてみると不自然である。では、どうしてここに二郎少年が現れなければならなかったのであろうか。

朝廷にあっては不遇の身の父親は出仕停止状態であるのに引き替え、美声の持ち主で笙の笛に秀でたその子息は「今年はじめて殿上」を果たし、しかも「世の人の思へる寄せ」も重いと云う。少年が四の君の庇護をしっかり得ていることは疑う余地がない。即ちこの少年は、後に頭中将を外戚の右大臣派へ赴けさせる橋渡し役を担うために登場したと解することができる。そして、この少年の美声と笙の上手と云う二つの音楽的美質は、酒席に幼い少年が登場すると云う不自然さを覆い隠すためのものであったと考えられる。

やがて光源氏は無念のうちに京を追われて須磨流竄の身となった。その無聊を慰めんと遠路も厭わず咎めも恐れず、頭中将は須磨まで訪ねて行く。

いとつれづれなるに、大殿の三位中将は、今は宰相になりて、人柄のいとよければ、時世のおぼえ重くてものしたまへど、世の中あはれにあぢきなく、もののをりごとに恋しくおぼえたまへば、事の聞こえありて罪に当たるともいかがはせむと思しなして、にはかに参でたまふ。

（須磨②二一三）

つい一年半前の夏頃にあっては光源氏ともども右大臣派からの冷遇に晒され、司召にも漏れるような窮状にあったと云うのに、この時点では既に宰相に栄進を遂げて政務に携わり、しかも時世のおぼえ

も重いと云う。殿上童として出仕を始めた子息の二郎少年に先導されるようにして政界復帰を果たしている。どうやら、光源氏の須磨流謫の間に、頭中将の政治的立ち位置に何らかの変節、即ち正室四の君を仲立ちとした右大臣派への接近があったものと推察される。

二人は積もる互いの身の上話が尽きると文作りに没頭して夜を明かす。

御土器まゐりて、「酔ひの悲しび涙灑く春の盃の裏」ともろ声に誦じたまふ。御供の人も涙をながす。（略）「形見に忍びたまへ」とて、いみじき笛の名ありけるなどばかり、人咎めつべきことはかたみにえしたまはず。（須磨②二一五）

酒盃を酌み交わし詩も吟じたが、これまでと違って管弦の遊びがない。歌を贈答して別れを惜しむ段になると頭中将は光源氏への餞別として、「形見に忍びたまへ」と云いながら「名ありける」「いみじき笛」を贈る。[7] 名うての笛の名手が、十年来の親友に重代の名笛を贈呈すると云うその行為は、一体何を物語るのか。それは、末摘花巻で一つ車に揺られながら笛を協奏したことに対する決別、もっと踏み込んだ云い方をするならば、爾後の光源氏との対立を予告するものであったと考えられる。

四、冷泉帝の時代

足掛け三年に亘る須磨・明石流謫より帰洛した光源氏は、冷泉帝の御代になると同時に内大臣に就任し、太政大臣とともに治世に臨む。故右大臣家勢力は政権を失い、「世の中の事、ただなかばを分けて、太政大臣、この大臣の御ままなり」（澪標②三〇一）と評されているとおり、光源氏は完全に政界への復帰を遂げた。頭中将も今は権中納言にまで栄達して父大臣を補佐している。

この新局面を迎え、頭中将は「むすめ」を冷泉帝に入内させた。その娘と云うのは旧右大臣家の弘徽殿大后の妹に当たる四の君を母とし、入内後は弘徽殿女御と称されるようになった人物である。その呼称自体、桐壺帝時代に光源氏と敵対関係にあったそのかみの弘徽殿女御をいやが上にも髣髴とさせる。しかも入内に際しては、祖父の太政大臣が自ら取り仕切ったと云う。嘗て右大臣派と敵対した左大臣・頭中将たちが、それまでの怨恨を清算するかのように弘徽殿大后一派の人脈に連なったのである。と云うよりは、頭中将一族が藤家の長者となって旧右大臣派をも取り込んだ、と云う方が正鵠を射ている。つまり、源家に対する藤家の結束が図られたのである。

ところで、光源氏が内大臣とならざるを得なかったのは、「源氏の大納言、内大臣になりたまひぬ。数定まりてくつろぐ所もなかり

ければ、加はりたまふなりけり。」（澪標②二八二）とあるように、左右の大臣が御代替わりに際しても退任することがなかったからである。ではこの時の左右の大臣はどんな人物であったのだろうか。

先ず右大臣であるが、「当帝（＝朱雀帝）の御子は、右大臣のむすめ、承香殿女御の御腹に男御子生まれたまへる」（明石②二六一）との記事から、承香殿女御の父君、即ち朱雀院の義父に当たる人物である。であれば、右大臣は朱雀院を介して弘徽殿大后とは浅からぬ縁で結ばれている。

次に左大臣であるが、「大宮（＝弘徽殿大后）の御兄弟の藤大納言の子の頭弁といふが、（略）姉妹の麗景殿の御方に行くに」（賢木②一二五）と云う条から、朱雀院の麗景殿女御の父は弘徽殿大后の兄弟の藤大納言であることが諒解され、一方で、女御の父親であれば大臣である筈であるから、藤大納言が左大臣となったと考える外はない。[8] 就任したのは、右大臣派が政権を独占した時に前左大臣が辞任した折であろう。

新時代は光源氏や旧左大臣派の栄耀の時代が到来したかのように語られてはいるが、実のところ光源氏は、弘徽殿大后と係わりの深い藤家一門の大臣らに囲繞される形となっており、寧ろ孤立無援とも云うべき状況に置かれているのである。

このような状況にあったからこそ、光源氏は前斎宮を一旦養女にした後に入内させようと画策した。表向きは故六条御息所の付託に応える措置であるが、その実状は入内させることによって帝の外戚となり、権勢を確保しようと云う戦略である。ここに至って、源家と藤家の対立と云う構図が一層明らかになって来たと云える。

絵合巻冒頭で前斎宮の入内が果たされる。養父内大臣の威光により「御宿直などは等」（絵合②三七四）しい状況にある。もとより立后を目論んで娘を先立って入内させていた頭中将は、当然ながら穏やかではない。ついに、青年時代「常に参り通ひたまひつつ、学問をも遊びをももろともに」（賢木②一三九）していた盟友同士は、源家と藤家の対立物語の当事者として仕立て直されて、最早衝突は不可避の情勢である。

斎宮女御は女性としての魅力に加え、絵を「いとをかしう描かせたま」（絵合②三七六）うため、同じく絵を「たてて好ませ」（同）給う冷泉帝は、この斎宮女御の方に心をお寄せになる。そこで、これを契機として頭中将方も光源氏方も物語絵を始めとした様々の絵画の蒐集に熱を上げる。立后争いを武力や策謀ではなく絵を合せることによって決着をつけようと云う、このうえもなく優美な戦いの火蓋が切って落とされる。

この絵合せをめぐる対立を境として、頭中将は「いまめきたまへる御心にて」（絵合②三七六）と描かれているように、「いまめ

く」・「いまめかし」と形容されるようになる。[9] 新たなる人物像に造型し直されたことが示される。実際、蒐集する絵画どもも「いまめかしうをかしげに、目も輝くまで見ゆ」（絵合②三八一）と描写されているし、御前の絵合せに臨んだ折に持参した調度類についても、「沈の箱に浅香の下机、打敷は青地の高麗の錦、あしゆひの組、華足の心ばへなどいまめかし」（絵合②三八六）などと描かれている。

絵合せの勝負は、斎宮女御方に軍配が上がった。勝敗を決定づけたのは、光源氏自らの筆になる須磨の日記絵巻であった。絵合せが果てると酒宴となり、明け方近くに管弦の遊びとなる。

二十日あまりの月さし出でて、こなたはまださやかならねど、おほかたの空をかしきほどなるに、書司の御琴召し出でて、和琴、権中納言賜りたまふ。さはいへど、人にまさりて掻きたてたまへり。親王、箏の御琴、大臣、琴、琵琶は少将命婦仕うまつる。上人の中にすぐれたるを召して、拍子たまはす。いみじうおもしろし。（絵合②三九〇～三九一）

楽器はすべて書司より召し出された皇室累代の名器ばかり、と云う格調の高さである。ここで注目すべきは、「和琴、権中納言賜りたまふ」と云う記述である。頭中将の人物像が新たに造型され、「いまめく」・「いまめかし」と形容されるようになったことは先に触れた。その人物が管弦に臨んで演奏したのが和琴であると云う。手にする楽器も「笛」から「和琴」へと、明らかな据え直しが施されている。しかもその和琴こそ、

いまめきたる物の声なれば、清く澄める月にをりつきなからず（帚木①七九）

律の調べのなかなかいまめきたるを、さる上手の、乱れて掻い弾き（少女③二六）

虫の声に掻き鳴らし合はせたるほど、け近くいまめかしき物の音（常夏③二三〇）

ことつひいと二なく、いまめかしくをかし（常夏③二三一）

掻き返したる音のめづらしくいまめきて（若菜下④一九〇）

など、殊更に「いまめく」・「いまめかし」と形容されることの多い楽器なのであった。[10] そしてこれ以降、公的な管弦の場でも私的な遊びの場でも、笛の名手であった頭中将は笛を吹くことはなく、専ら和琴の名手として描かれるようになる。

この二年後、冷泉帝の后には絵合せに勝利した斎宮女御が選ばれた。そして、光源氏が太政大臣に昇任すると、既に大納言となっていた頭中将もその後追いをするようにして内大臣に就任する。すると唐突に、立后争いに敗れた頭中将にはもう一人別の「わかんどほり」腹の娘のあることが明かされる。今度こそはこの娘を春宮の后がねに、との腹積もりであると云う。

大臣和琴ひき寄せたまひて、律の調べのなかなかいまめきたるを、さる上手の、乱れて掻い弾きたまへる、いとおもしろし。

（少女③三六）

大宮邸で、その后がねの雲居雁が僅かに爪弾いた箏を押しやると、演奏姿を見守っていた頭中将は「和琴ひき寄せ」「掻い弾」く。「さる上手の」と形容されるその演奏は、「いとおもしろし」と賞賛されている。

そんな感興の折も折、夕霧が顔を覗かせた。

「時々は異わざしたまへ。笛の音にも古ごとは伝はるものなり」とて、御笛奉りたまふ。いと若うをかしげなる音に吹きたてて、いみじうおもしろければ、御琴どもをばしばしとどめて、大臣、拍子おどろおどろしからずうち鳴らしたまひて、「萩が花ずり」などうたひたまふ。

（少女③三七～三八）

夕霧は母の葵上に先立たれてからは十歳過ぎまで、祖母大宮の三条邸で雲居雁とは姉弟のようにして育てられた。いつともなく二人には恋心が芽生えている。その夕霧に頭中将は横笛を贈った。光源氏の嫡男に、何故この時笛を贈る必要があったのだろうか。

頭中将と光源氏は冷泉帝の立后を巡って争いはしたが、決定的な仲違いをした訳ではなかった。大納言兼右大将と云う重々しい身分になった後も、頭中将は光源氏の許を少なくとも二度訪れている。一度目は夕霧の字付け儀式、その次も同じく夕霧の寮試の予行である。特に寮試の予行では、甥に当たる夕霧の秀才振りを目の当たりにして感涙すら流しているから、隔てのない交際が続いていたと見るべきである。

ところが、この笛の贈呈から間もなく、只ならぬ事情を察知した頭中将は、雲居雁を自邸に引き取って夕霧との仲を裂いてしまう。頭中将と光源氏・夕霧とはこれまでになく険悪な状態となる。四年後に頭中将と光源氏とはそれぞれ、「さぶらはではあしかりぬべかりけるを、召しなきに憚りて」（行幸③三〇六）、「さるべきついでなくては対面もありがたければ」（行幸③二九九）と述懐しているとおり、私的には一度も面会することはなく絶交状態が続く。と云うことは、嘗て須磨で頭中将が光源氏に笛を贈った時と同じように、この場合も笛の贈与が、やがて両者の間に生じる不和を予告していたと云えるのではないか。だが、そんな展開が俟っていようとは知る由もなく、夕霧はその笛を吹き頭中将は拍子をうち鳴らして催馬楽を歌う。

翌年、早咲きの桜が色づいた二月二十日あまり、盛大に朱雀院行幸が執り行われた。桐壺聖代の花の宴を髣髴とさせる舞楽春鶯囀が終演になると酒盃が献ぜられ、やがて管弦の宴が始まる。

楽所遠くておぼつかなければ、御前に御琴ども召す。兵部卿

宮琵琶、内大臣和琴、箏の御琴院の御前に参りて、琴は例の太政大臣賜りたまふ。さるいみじき上手のすぐれたる御手づかひどもの尽くしたまへる音はたとへん方なし。

（少女③七三～七四）

演奏者に注目してみると、琵琶が兵部卿宮、箏が朱雀院、七弦琴が光源氏であれば、身分柄から考えて和琴は冷泉帝[11]であるのが順当だが、頭中将が弾いた。即ち、この時点で既に頭中将は、「ただ今はこの内大臣になずらふ人なしかし」（常夏③二三〇）と世に称揚されるほどの、当代随一の和琴演奏家であったと考えられる。

朱雀院行幸の翌年、頭中将の忘れ形見の玉鬘が光源氏に仕える侍女によって見出され、世間的には光源氏の娘として六条院で養育されることになる。そしてそれから二年後の正月、頭中将は玉鬘の裳着に際しての腰結役を依頼されるが、体よく辞退をする。すると翌月母の大宮に呼び出され、三条邸で久々に光源氏と対面することになる。

さし向かひきこえたまひては、かたみにいとあはれなることの数々思し出でつつ、例の隔てなく、昔今のことども、年ごろの御物語に日暮れゆく。

（行幸③三〇六）

大宮の仲介により、四年を経て漸く光源氏と和解が成った。その二年後、故大宮の三回忌法要を機に夕霧とも和解を果たし、ほどなく雲居雁との結婚も許諾した。

同じ年に光源氏は准太上天皇の高みに昇り、頭中将もついに太政大臣に納まり、その翌年の正月には光源氏四十賀の最初の賀宴が開催された。

衛門督のかたく辞ぶるを責めたまへば、げにいとおもしろく、をさをさ劣るまじく弾く。（略）父大臣は、琴の緒もいと緩に張りて、いたう下して調べ、響き多く合はせてぞ掻き鳴らしたまふ。これは、いとわららかに上る音の、なつかしく愛敬づきたるを、いとかうしも聞こえざりしをと親王たちも驚きたまふ。琴は兵部卿宮弾きたまふ。（略）御気色とりたまひて、琴は御前に譲りきこえさせたまふ。もののあはれにえ過ぐしたまはで、めづらしき物一つばかり弾きたまふに、ことごとしからねど、限りなくおもしろき夜の御遊びなり。（若菜上④五九～六〇）

娘の玉鬘主催の賀宴であるため、御遊び用の楽器類はすべて頭中将自らが取り揃えた。和琴も七弦琴も天下無双の逸器である。子息柏木の「をさをさ劣るまじ」き見事な和琴の演奏は、彼が藤家の立派な後継者たり得ていることの証である。

その後紫上や秋好中宮主催の賀がうち続き、師走には勅命による夕霧主催の四十の賀宴が催された。

琵琶は、例の兵部卿宮、何ごとにも世に難き物の上手におは

して、いと二なし。御前に琴の御琴、大臣和琴弾きたまふ。年ごろ添ひたまひにける御耳の聞きなしにや、いと優にあはれに思さるれば、琴も御手をさをさ隠したまはず、いみじき音ども出づ。

（若菜上④一〇〇～一〇一）

御遊びになると頭中将が和琴を演奏する。掻き鳴らす和琴の音は優美を極め、それを聴く光源氏も感動で胸が一杯である。そして、その演奏に応えるように光源氏が七弦琴の秘伝の限りを披露すると、喩えようもないような絶妙の音色が湧出してくる。二人は無二の親友同士であった青年時代に立ち返ったかの如くに語り合い、酔泣きをこらえることができない。そこには最早敵対していた頃の面影はまったくない。そして、この演奏を最後に、頭中将はこの物語内で和琴を奏でることはない。光源氏と心から和解した今、敵対の表象であった和琴は、既にその用を為さなくなったためである。

五、まとめ

ここまで頭中将の雅楽演奏について、光源氏との係わりを軸としつつ時代を追いながら眺めてきた。主人公光源氏と胸襟を開いて公私にわたり苦楽を分かち合った青年時代には、頭中将は笛の名手であり、やがて源家と藤家と云う宿命的な政治的対立時代を迎えると、今度は和琴の名手として造型し直された。その間には頭中将から光源氏への笛の贈与もあった。そして、これまで述べてきたように、雅楽演奏の場面にはそれぞれに意味づけが籠められていた。頭中将の、笛の上手から和琴の名手へと云う変貌は、単なる彼自身の嗜好の変化を示すものではなく、実は物語主題の転換の表明であり、それは作者一流の表現方法のひとつであると云える。

注

① 「頭中将」と云う言葉は本来官職名の略称であるが、本稿では当人の官職名の変遷に拘らず「頭中将」と云う呼称を固有名詞的に使用している。

② 『源氏物語』の本文は阿部秋生他校注『新編日本古典文学全集』（小学館）に拠る。引用本文末尾には括弧内に巻名・巻号・頁数を示してある。なお本文には、私に括弧書きにして注記を加えた箇所がある。

③ 倉田実「頭の中将と源氏――「馴れ」から「挑み」へ――」（『源氏物語の鑑賞と基礎知識二二』至文堂、平成一四年、一三八頁）、木船重昭『源氏物語の研究』（大学堂書店、昭和四四年、二三二～二三三頁）

④ 光源氏は「御遊びのをりをり、琴笛の音に聞こえ通ひ」（桐壺①四九）、「御琴笛などさまざまに仕うまつらせたまふ」（若紫①二三四）など、御遊びで笛を吹いている。

⑤ 中川正美氏は「互いに吹き合わせることによって言わず語らずのうちに慕情を共有したのである」とする（『源氏物語と音楽』和泉書院、平成一九年、四八頁）。

⑥ 頭中将も翁の年齢に達すると高麗笛を好んだようで、光源氏から「好みたまふ高麗笛」（若菜上④一〇一頁）を贈呈されている。また、柏木

も、「童よりいとことなる音を吹き出でしに感じて」（横笛④三六八）故式部卿宮から陽成院の御笛を賜ったほどの名手である。左大臣家は笛の名手を輩出する家柄と云える。

⑦　笛の贈り主については、ⓐ頭中将（孟津抄）、ⓑ光源氏（湖月抄）、ⓒ両者双方（万水一露）の三つの説がある。現代の注釈は次のとおり。

ⓐとするもの＝『日本古典文学大系』、『日本古典文学全集』、『新編日本古典文学全集』、玉上琢弥『源氏物語評釈』、『源氏物語注釈』、『源氏物語の鑑賞と基礎知識』。

ⓑとするもの＝『新潮日本古典集成』、『日本古典全書』、『対校源氏物語新釈』。

ⓒとするもの＝なし。

なお、『新日本古典文学大系』は三説のいずれとも確定しがたい、とする。

本稿はⓐを支持する立場であるが、それは、光源氏が須磨に持参した楽器は「琴一つ」（須磨②一七六）との記事から、光源氏は笛は所持していなかったと考えざるを得ないからである。

⑧　坂本舜氏も同様の見解を述べておられる〔「玉鬘とその母夕顔」（『源氏物語の探求第一一輯』風間書房、昭和六一年、三五頁）〕。

⑨　森野正弘氏は「頭中将に関して「いまめく」と云う形容の施されるのが、ここを嚆矢とする」と指摘されている〔「頭中将と和琴／光源氏と琴の琴」（『中古文学』第五五号、平成七年五月）〕。

⑩　森野正弘氏によると、弦楽器に関して「今めかし」と形容される用例は一一例で、うち最も多い五例が和琴である〔「紫上と和琴――言語空間としての六条院の女楽攷――」（『国学院雑誌』第九四巻第八号、平成五年八月）〕。

⑪　冷泉帝は後の巻で、「和琴を弾かせたまひて、この殿など遊びたまふ」（竹河⑤九九）とあるように、和琴の上手として描かれている。